

学級会の指導が学級経営の充実に働く

授業技術分科会主査 福田 俊彦

1 テーマ設定の理由

(1) 目指す学びの姿について

学級経営で大切なことは、教師による子供一人一人の的確な理解であり、その理解の下、一人一人の子供が学級に自らの居場所を実感できる場をもてるように教育活動を組み立てることである。つまり、多様な生活経験を経てきた子供が、学級、学校という任意の集まりの中での生活を通して、相手の身になって考える場面、相手のよさに気付き受け止める場面、互いの不安や十分ではないことを補完し合う場面などを通して、自分のよさや可能性を発揮し協働しつつよりよい学級生活を創り上げていく学びの実現の起点となることである。

そこで、学級生活を自ら築いていく重要な場面である、子供が自分たちのこととして学級生活の事象に関わる学級会を一連の活動として累積的に実践を積み重ねていく分科会とする。特別活動の内容である学級会は、教育課程に位置付けられており、その着実な実践が結果として学級経営の充実につながることは、日本特別活動学会の紀要、全国特別活動研究会の紀要などに記されている論文や実践報告からも確認することができる。学級会の授業がどの学級でも累積的に実現され、どの先生も学級会に取り組むことができるよう、学級会の指導の在り方を発信していく。

学級経営の充実を図る教育活動の切り口の一つとして、学級会の指導を取り上げる根拠として以下のことを付け加えておく。学習指導要領の改訂の経緯、令和3年1月26日の中央教育審議会答申『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」に記されていることである。社会の変化は加速化し、グローバルなつながりは、社会の様相を多様化させ、予測しがたい事象に直面することに向かっている。子供がそのような社会の担い手となることを考えると、今の学びで育まれる資質・能力が、先の社会にどのようなつながっていくのかを教育現場として考えることが重要となる。社会の変化に積極的に向き合い、多様な他者と協働しながら、よりよい解を見いだしていく。

更に、解を見いだしたことで終わることなく、その後の生活状況の変化に応じて解を更新し、新たな価値を創り出していく。子供はこの学びの過程で、活動の目標をより明確にしていくこと、その目標を実現するためのよりよい手立てを構築していくこと、そして、目標の実現状況の振り返りと、現状の捉え直しを行う経験を仲間と共に経験していくことになる。目標の内容の明確化、目標に向かう手立ての構築、実践とその振り返りが一人一人の子供の学びとしてつながり、子供が学びのつながりを捉えることから、新たな価値を創り出していることに気付き、その気付きが次の活動を生み出していく。そして、一人一人の子供がこの新たな価値を創り出しているという学びを自分の学びとして自覚することである。この学びの自覚は、他者と協働するよさの自覚であり、自分のよさや可能性を発揮できていることの自覚であり、他教科、学校生活下における多様な活動にも汎用的できる力としての自覚である。

特別活動では学級会の役割が重要視されている。子供が生活する学級では、日々、様々な事象が展開される。子供の関わりが強い事象があれば、関りの弱い一過性の事象もある。自分のこととして、自分たちのこととして捉え解決しなければならない事象に関して、その問題点を見だし、みんなで

問題解決に関わっていくことは、予想できない変化やジレンマに積極的に向き合っていく基礎となる。生活を改善していく過程は、多様な他者と協働し解を創り出すことの基礎となる。みんなで決めたことを、協力して実践し、振り返ることは、見いだした解をそのまま終わらせず、生活の状況変化に応じて再構成していく基礎となる。学級会を通して子供が創り出す経験には、よりよい学級生活の積み重ねがあり、学級経営の充実の姿として観ることもできる。学級経営の充実は、単に教師の感覚、センスのよさから捉えるのではなく、子供が学級会を通して、自分たちの生活をよりよくしていることから具現化できることを、全ての教員が学級会の指導に取り組むことで具現化する。

(2) 学習過程に観る指導の内容として

事前の活動、本時の活動、事後の活動を一連の活動として捉えた指導について述べていく。

【問題の発見・確認】の段階

子供が議題を見いだせないという声を聞く。「議題」とはどのようなものであるか。また、話し合ってもよいことは何なのか。生活課題から子供たちで解決できることを、必然性や緊急性、自治的範囲から選定していく過程を大事にしていくことである。そのことにより、子供の議題に対する関心、問題解決への意欲が高まっていく。

議題選定の過程では、提案理由に記される内容が練り上げられ、より問題点が明確となり子供にとって自分のこととして捉えることになる。「解決したい」という思いが、考えを生み出し、話し合いでよりよい解決を目指そうとする意欲につながる。

学級会に対する自分のめあてを設けることは、活動への取組をより具体化し、その活動の姿を振り返ることから、自分の学びの自覚となる。学びを自分とを関わらせてしっかりと捉えることが、次の活動への明確な、意味のある目標を設定することになる。

【解決方法の話し合い】

時間内に話し合いが終わらないという課題が上げられる。決められた時間の中で、何について話し合い、どのようなまとめ方から合意形成に向かっていくのかという力を育てていくことは重要な側面でもある。時間内に話し合いでの合意形成を行うには、子供の経験値を生かし、話し合う内容の精選も必要になる。子供たちが話し合い、解決の方策の案から合意形成できる見通しをもてるよう、出し合ったことを比べながらよりよい内容を創り上げていく経験が積み重ねられることが求められる。

事前にどのような意見が出ているかという情報提供、何のために話し合い、どのような解決を目指しているのか、提案理由の内容と関わらせて考えられるようにする資料提示、教室環境の構成も大切となる。

【解決方法の決定】

折り合いつつ合意形成に向かうことが難しい。比べ合うことができる情報量について考慮することが必要である。更に、出し合った案について比べつつ話し合うことからよりよい内容が価値付けされていく過程がある。出された案の内容をブラッシュアップしている話し合いであることを子供が自覚できるように指導する過程であり、合意形成への道筋となることを理解できるようにする指導が求められる。

【決めたことの実践】

話し合いでの合意形成後、実践に向け計画を立て、活動が始まる。必要な役割が生じる。役割ごとの計画、準備の段階も、学びの自覚として大切に捉える場面である。提案理由の内容に向かっているのか、進捗の状況を共有することから、提案理由の内容の確認、折り合いつつ合意形成に向かったときの内容から、順調なこと、うまくいってないこと、アイデアが欲しいことなどを介して問題解決に全体で進めている実感をもてるようになる。

実践後には、提案理由の内容、話し合いの状況を振り返り、この実践について一人一人が成果や課題をもてるようにする。

【振り返り】

一連の活動を振り返り、何がよかったのか、もっとよくしたことは何か、大切にしたいことは何か、変えていきたいことは何かなど、次の活動につながる振り返りが大切である。学級会ノートへの記載だけに留まらず、振り返りの内容について話し合える時間を設定することも考えられる。

2 授業の視点

学級会の指導の基礎・基本の押さえとして、相互に関わり合う3つの視点について述べる。

(1) 「人間関係形成」

よりよい学級生活を創ること、よりよい人間関係を築くことは、学級会を通して目指すところである。学級会は、自治的活動であり、実践活動であり、集団活動であることから、子供と子供が関わる場面が多様に出てくる。その子供相互の関わりの中で学ぶは、互いの考えの違いに気付いたり、互いの頑張りを受け止め合ったり、目指すことへの取組で互いのよさを生かし合ったり、目的に向かう中で達成感を感じ合ったりすることである。その一つ一つの場面を、他者の気持ちを受け止めながら経験として積み上げていくことで、安定した人間関係が形成されていく。人間関係を形成していくことは、子供が歩む人生の各所で会うことであり、汎用的な力である。

(2) 「社会参画」

学校生活で子供は多様な集団と関わる。その集団との関わりは、一人一人の子供にとってどのようなものであることが望ましいのかである。集団に自分の役割があり、その役割が必要とされ、その活動が認められることは、その集団を居心地よく感じる基となる。もっと、頑張ろうとする意欲も高まっていく。子供にとって、学級がそのような存在であることは、自分のよさや頑張りを実感することにつながる。集団に参加するという意識ではなく、参画するという経験は、これからの社会に対して積極的に向き合っていく力を育むことになる。

(3) 「自己実現」

集団の中で、自分の力を発揮したい。子供が思うことである。幼児教育の段階から、遊びの場で自分のできることを発揮する。できたこと、できるようになったことが、次の目標をもてるきっかけになっていく。自分ができることを行い、できそうなことにチャレンジしていく。目標に向かっていく学びは、自己の成長を実感する瞬間でもある。うまくいかないときもある。失敗を糧として、回復力を発揮できるような環境を創ることが求められる。子供にとっては将来にわたって、順風満帆のこと

ばかりではない。うまくいかないとき、思うようにならないときこそ、自分を見つめ直し、レジリエンスの力を発揮できるようにする。

3 研究の視点に迫る手立て

研究の視点で示した視点の具現化を目指すために、授業研究で取り組んでいく手立てについて。

(1) 子供の問題意識を高める手立てとして

- 一人一人の子供が学級会への参画意識をもてるようにするため、今回の学級会にどのように参画するのか、これまでの自分の学びの振り返りから「めあて」を設定する。
- 選定した議題の内容や背景を捉え、その解決に向けた必然性を共有できるようにするため、計画委員会（司会グループと提案者）で作成した活動計画に関する確認や意見を聞き合う時間を取る。

(2) 折り合いつつ合意形成を図る手立てとして

- 話し合いを賛成、反対を二項対立として捉えるのではなく、「どのようにしたらできるのか」を話し合いの論点としていく。
- 合意形成に向かうきっかけを捉えられるようにするため、合意形成に向かう発言を全体で共有できる助言をしたり、子供の反応から捉え直したりできるようにする。

(3) 実践に意義を見いだして取り組めるようにする手立てとして

- 実践までの活動に子供がその意義を自覚できるようそれぞれの役割の活動状況を把握し合う場を設ける。
- 一連の活動として学級会を捉えられるようにするため、事前・本時・事後の活動のつながりが可視化できる学級会ノートの累積的な使用、自らアクセスしやすい教室環境の工夫をする。